

「飲み友達」

大石 令子

年に4・5回 集まる仲間がいる。いつも誰かから「会いたいの」とメールが送られてくると、すぐに日程調整が始まり、たちまち飲み会日が決定する。場所はいつも決まった店で行われるので、日にちと時間さえ決めればいい。女6人、飲み会が決まると、各々その日を楽しみに指折り数えて仕事に家事に頑張る。

みんな 子どもの幼稚園時代のママ友達だが、かれこれ付き合いは20年を超えている。幼稚園時代は子犬のように走り回る子どもたちを追い掛け回しながら、幼稚園帰りはいつも誰かの家に集まり、子どもは子ども同士で遊び、母親たちはそんな子どもを視線の端に置きながらおしゃべりに興じていた。その後、子どもたちは別々の学校に進んでいったが、母たちの付き合いはつかず離れず、延々と続いている。まだ、子どもを置いて出かけることが出来ない時は、お互いの家で夫を巻き込みながら、家族で行き来して交流を楽しんだ。こんなに長い付き合いになるとは誰も思っていなかっただろう。しかし、6人の集まりはお互いにとってかけがえの無い、心いやされる時間になっていることは確かだ。

それぞれ夫や子ども、親の介護に仕事と愚痴を並べる。見栄も体裁も無く、その場では本心を吐き出す。誰かが「聞いてよ」と話し始めれば、他の5人は「どうした?」と聞き役に回る。話は尽きず、お店が閉まるとカラオケに移動して午前様になるのはいつものこと。翌日は少しお酒の残った重たい頭と身体に気合いを入れて、いつもどおりの生活に戻る。しかし、身体と頭は重くても心は軽くさわやかになって「さあ今日から又頑張るぞ」という気になっている。心置きなくしゃべることが何よりのリフレッシュだ。

そんな友達がいること、そして 日頃些細な不満や時には腹のたつこともあるが、そんな飲み会に行くことを許してくれている家族であること、それは何より幸せなことなのだと思う。次は午前様などしないと思う、塚田さんにバトンタッチ!

❁ 50年! 短いのか長いのか!

両親が亡くなり実家がなくなると法事でもない限り郷里である広島に行く機会がなくなりましたが、昨年の父の十三回忌に続いて今年は母の七回忌があり、6月初旬に広島に行きました。「帰るときは連絡してよ」と幼友達からいつも言われるのですが、スケジュールが混んでいるときにはそれもできません。今年の年賀状に6月に行く事を一言書きましたら、数人の友達がお互いに「何か連絡きとる?」「まだなーも言うてこん?」と連絡を取り合っていたそうです。

1週間前になってようやく連絡をしましたら、いつも集まる常連が旅行中や法事、娘さんの出産で集まらず、その代わり今回は中学校卒業以来初めて会う人が2人いました。1人は同じクラス、もう1人は1度も同じクラスになってない人で、存在の記憶もおぼろです。それなのに私が帰ると聞いて2人とも「是非私も入れて」と集まってくださいました。広島弁丸出しの6人と子どもの頃の話はもちろん、同期の人たちの消息など賑やかに盛り上がりました。50年なんてついこの間という感じです。毎年同期の30-40人で旅行をしていて、今秋は高野山ということで「あんたもくりゃええがね。きんさいや」といわれ、すっかりその気になっています。

翌日は高校時代の友人が集まり、こちら知らない人が2人いて、でもそんなことは関係なく盛り上がりました。初めて会った女性から、「ずっと前の同期会の二次会でダンスホールに行ったでしょう?あなたを見かけて、話しかけたかったんだけど、いつも周りに人がいたけん、近寄れなかったんよ。今夜は夢が叶うてすごく嬉しいんよ!」と言われたのですが、多分ダンスのできない私が、楽しそうに踊っている人たちを羨ましく思いながらも、引っ張り出されないように奥の方に座っておしゃべりしていたことだろうと思いました。同じクラスでも異性とは話もしなかった世代ですが、50年を経ると机を並べた仲間はやはり懐かしく、思い出話も共有できますし、大切にしたいと思います。私は転校生なのでこの学校には1年弱しか行ってないのですが、広島仲間も東京仲間も私のことを主(ぬし)のように思っているようです。